城を歩く会７月定例会「夏期研修会」

# 会津白虎隊と二本松少年隊

## 秋の一泊旅行もう一つの見所

平成２５―７―１８

山岸弘明

京都守護職として幕末の京都治安維持にあたった会津28万石・松平容保は、慶応４年鳥羽伏見の戦いで幕府軍が大敗すると15代将軍徳川慶喜とともに大坂を脱出した。会津藩は京都で禁裏の警衛を担当しもともと勤皇の意思は堅かったが、見回組、新撰組を配下としたため官軍の憎しみは強く、朝敵として徹底抗戦せざるをえない立場に立たされた。８月から一か月におよぶ篭城戦を繰り広げるがついに落城。白虎隊の悲話を生んだ壮絶な戦いは名高い。この敵対行動により会津は没収され、下北半島の僻地にわずか３万石があたえられることになる。

本講座では今秋の一泊旅行「維新戦争で敗れた城を訪ねる」、もう一つのみどころ会津白虎隊と二本松城少年隊にスポットをあてる。

### 1 新政府の発足

1868（慶応4）
1 鳥羽・伏見の戦い❶。慶喜追討令。相楽総三の赤報隊の東進❷。列強6カ国，局外中立を宣言
3 相楽，偽官軍として処刑❷
五箇条の誓文公布。五榜の掲示
4 江戸城無血開城❸
閏4 政体書の制定
5 奥羽越列藩同盟結成
上野戦争（彰義隊壊滅）❹
7 江戸を東京と改称
長岡城の戦い終わる❺
8 天長節を制定
明治天皇，即位の礼
9 明治と改元（一世一元の制）
会津の戦い終わる（若松城落城）❻
1868（明治元）
1869（明治2）
3 東京行幸
5 五稜郭の戦い（箱館戦争）終わる（戊辰戦争終結）❼

### 2 戊辰戦争

錦御旗（錦旗）　天皇が「朝敵」の征討を命じる際，軍事的指揮権を委任する意味で，下賜された旗。「日之御旗」と「月之御旗」の二つ1組。

**⑦五稜郭の戦い（箱館戦争）**
1869（明治2）年5月
旧幕府軍をひきいた榎本武揚らが降伏，土方歳三らは戦死。五稜郭は開城となり戊辰戦争が終了。

◀五稜郭

**⑥会津の戦い**
1868（慶応4）年8～（明治元）9月
会津・庄内藩への追討令に対し，東北諸藩は奥羽越列藩同盟を結んで抵抗。会津藩は白虎隊・娘子軍も参加したが，会津若松城は攻め落とされた。図は白虎隊自刃の場面。

**⑤長岡城の戦い**
1868（慶応4）年5～7月
局外中立の長岡藩家老河井継之助は停戦を拒否されたため戦ったが，7月落城。

**④上野戦争（彰義隊の戦い）**
1868（慶応4）年5月
旧幕臣は彰義隊を結成して，上野寛永寺に拠り反抗したが，大村益次郎指揮の総攻撃により1日で壊滅。

**①鳥羽・伏見の戦い**
1868（慶応4）年1月
慶喜の辞官納地に憤激した旧幕府の兵が入京し，薩長兵と交戦。しかし新政府軍の大砲や新しい銃に苦戦した。

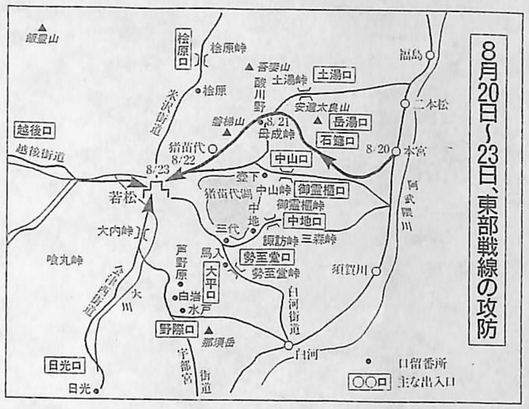
**②赤報隊の東進**
1868（慶応4）年1～3月
赤報隊の相楽総三は年貢半減令をかかげて東山道を進撃したが，偽官軍とされ，諏訪で処刑された。1870年，相楽らをいたみ下諏訪に魁塚がたてられた。

相楽塚（魁塚）

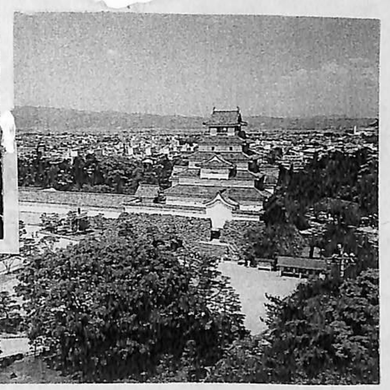
**③江戸城無血開城の会談**
1868（慶応4）年3月13～14日
江戸薩摩藩邸でおこなわれた西郷と勝の会談により，15日に予定の江戸城総攻撃は中止，4月，無血開城となった。

本講座のあと一泊旅行の申し込み受付を行ないます

1－2




↓松平容保と会津若松城↓



白河城↑　↓二本松城

東北大地震で城じゅう大被害

| | | |
|---|---|---|
| 1月3日 | | 鳥羽伏見の戦い、徳川軍敗走 |
| 〃 | 6日 | 徳川慶喜、松平容保大坂城を脱出 |
| 〃 | 17日 | 仙台藩に会津討伐命下る |
| 2月12日 | | 慶喜、寛永寺に謹慎 |
| 2月22日 | | 容保会津に戻り、戦闘準備開始 |
| 4月11日 | | 江戸開城、慶喜水戸へ向かう |
| | | 大鳥圭介　旧幕軍率いて江戸を退去 |
| 閏4月11日 | | 白石会議、会津への寛大処分嘆願書提出 |
| 〃 | 20日 | 会津救解を却下した世良修蔵暗殺される |
| 〃 | 22日 | 白石列藩同盟結成 |
| 5月1日 | | 白河城落城 |
| 〃 | 3日 | 奥羽列藩同盟成立 |
| 〃 | 6日 | 奥羽越列藩同盟に拡大 |
| 〃 | 19日 | 長岡城落城 |
| 6月6日 | | 同盟軍事総督・輪王寺宮、会津に入る |
| 〃 | 24日 | 新政府軍が棚倉城を制圧 |
| 7月4日 | | 秋田藩、同盟を脱退 |
| 〃 | 13日 | 平城落城 |
| 〃 | 26日 | 三春藩降伏 |
| 〃 | 29日 | 二本松城落城、少年隊の悲劇おこる |
| 〃 | | 長岡城再び落城 |
| 8月3日 | | 新政府軍会津攻め方針決定 |
| 〃 | 20日 | 新政府軍が二本松を出発 |
| 〃 | 21日 | 母成峠の戦い |
| 〃 | 22日 | 猪苗代城落城、新政府軍十六橋を突破 |
| 〃 | | 容保滝沢本陣に進む |
| 〃 | 23日 | 会津軍戸の口原の戦いに敗れる、白虎隊自刃 |
| 〃 | | 新政府軍会津城下へ侵入、会津軍篭城態勢に入る |
| 〃 | 14日 | 新政府軍総攻撃開始 |
| 9月15日 | | 仙台藩降伏 |
| 〃 | 21日 | 容保開城を決意、藩士に伝達 |
| 〃 | 22日 | 容保降伏、会津若松城開城 |

### 秋の一泊旅行「戊申戦争で敗れた城を訪ねる」

主要行程＝変更することがあります

第１日＝１０月８日（火曜日）
８時００分　上野集合、出発、東北自動車道
白河小峰城、棚倉城、猪苗代城、土津神社
１７時３０分　ホテル着、宴会、宿泊

第２日＝９日（水曜日）
８時１５分　ホテル出発
会津若松城、日新館、飯盛山、滝沢本陣、二本松城
２０時００分　東北自動車道、上野着、解散

「東北大地震」石垣倒壊にともなう修復工事のため白河小峰城はすべて、二本松城は大手門に相当する箕輪門周辺が立ち入り出来ません。生々しい被害状況と工事作業を遠望します。

# 二本松落城と少年隊の活躍

## 1）藩兵不在の二本松城に新政府軍の大攻勢がはじまる

①慶応４年６月、奥羽越列藩同盟の結成に対抗した新政府は東征大総督に「奥羽征討令」を発した。
白河口＝総督・鷲尾隆聚、参謀・板垣退助(土佐)、伊地知正治(薩摩)

②新政府軍の板垣隊は５月上旬から白河城にあったが、６月 24 日本隊と合流して棚倉城を攻略、ついで泉、湯長谷陣屋、平城を落とした。新政府軍の怒涛の進撃に時勢を判断した秋田藩は７月４日列藩同盟を脱退、弘前と新庄藩もこれに続いた。列藩同盟は崩壊の道を歩み始めた。７月 27 日二本松に隣接する三春藩も寝返った。

＊三春藩は同盟の一員ではあったが消極的で、河野広仲が藩論を勤皇にまとめて政府軍に下った。藩主は城外に出て新政府軍を迎え、広仲は士佐隊に志願して二本松と会津攻略で影響力を発揮した。

③７月 28 日、河野広仲の三春藩を先導とする新政府軍は大挙二本松城下に迫った。
当時、二本松藩兵は白河口などに出陣中であり、城は城主・丹羽長国とわずかな側近、少年隊、農兵であった。万一に備え藩主長国は米沢に退転し、城代家老の丹羽和左衛門が後事を託される。

## 2）二本松城最後の砦・大壇口で玉砕――少年隊の悲劇

④７月 29 日早暁、新政府軍は三方から二本松城に襲い掛かった。22 歳の木村銃太郎を隊長に組織された 12 歳から 17 歳の少年隊 63 名に出陣命令が下り、うち 22 名は 100 匁大砲１門を引いて城南西の大壇口に陣を布いた。奥州街道を北上してくる板垣退助隊を食い止める最後の砦であった。戦いは朝もやをついて始まった。少年たちは砲弾を放ち、矢弾が尽きると抜刀して敵陣に突入したがほとんどが戦死した。

⑤二本松城箕輪門前に大壇口での戦闘姿を現わした二本松少年隊群像、丹羽家菩提寺の大隣寺に少年隊士の供養塔が並び、「少年隊副隊長二街道衛守戦死の地」碑がある。一泊旅行、時間とれれば大隣寺にも寄りたい。

## 3）城を自焼して本丸で自刃――城代家老の最後

①城代家老丹羽和左衛門と家老丹羽一学らが本丸に火を放って切腹、二本松城は炎に包まれたった１日で落城した。本丸に「自刃の地」碑がある。

二本松城３の丸高石垣

少年隊士群像

隊士を送り出した母家

大手門に残る箕輪門

大壇口古戦場



# 「会津戦争」と白虎隊の悲劇

## 1）新政府軍の会津侵攻

①二本松城を攻め落とした新政府軍は東北戦争最大の攻撃目標である「会津」へと迫る。
進攻ルートは広仲の建策でもっとも守りが薄い石筵（いしむしろ）口と決まる。

③８月 20 日、薩摩、長州、土佐、肥前、大垣、大村、佐土原７藩およそ 2000 人が二本松を出発し、石筵から母成（ぼなり）峠へと進む。

④天嶮を頼みとした母成峠の守りは 500 人、だが農兵が主力で手薄い。旧幕府伝習隊と新撰組が応援に駆けつけたが守りきれず、大砲 20 門を繰り出した近代戦術の猛攻で翌 21 日の早朝に突破された。

⑤新政府軍は最前線基地の猪苗代城へ突進、勢いを恐れた城兵は無抵抗のまま自焼した。

＊新鮮組副長土方歳三らは会津を見限って仙台に脱出、のち榎本武揚とともに五稜郭で戦い多くが戦死した

⑥新政府軍はすばやく進撃、会津藩最後の防衛線「十六橋」も一気に突破して会津城下に迫った。

## 2）煙霧天をおおう――落城とはや合点した少年隊士たち

①白虎隊は 16 歳から 17 歳を対象とした予備軍で、身分別に士中一番隊、二番隊、寄合一番隊、二番隊、足軽隊の５組、総勢 343 名であった。

②８月 22 日朝、白虎隊は母成峠での緊急対応のため前線基地滝沢本陣へ出陣する容保に従う。戦局が急転し、「士中二番隊」37 名に最前線への戸の口原への出陣命令が下る。

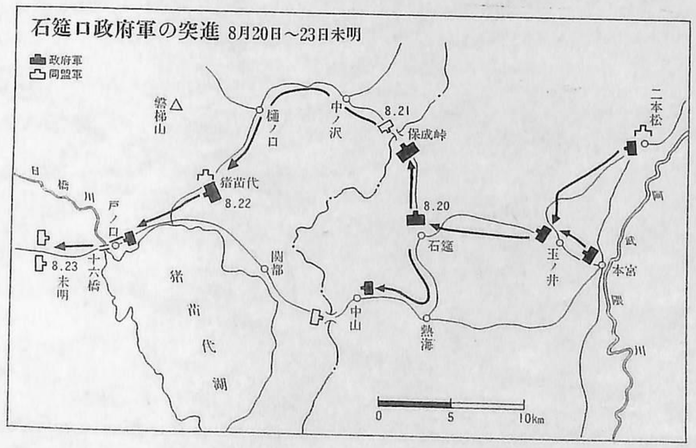
③この日は野営、急の出陣で食料もない。43 歳の隊長が食料調達のため隊を離れると飢えと疲労、恐怖の中でまんじりもできない一夜を送る。この間情勢は一転し侵攻する敵陣中に孤立する。明けて 23 日前進、射撃されて退却、脱落者を出しながら間道伝いに戸の口洞窟にたどりつく。

④洞窟を抜け飯盛山で少年たちは絶望的な光景を目にする。
黒煙に包まれた会津若松城、「君公がなくなったいま、お供して腹を切るまで」会津魂を持つ彼らに迷いはなかった。14 時ころ（10 時ともいう)自刃、一泊旅行では滝沢本陣、自刃の地飯盛山をめぐる。白虎隊士 20 人の墓、かたわらに少年兵の死を悼んだ容保の句碑がたつ。
いくたりの　涙は石にそそぐとも　その名は世よに朽ちじとぞ思う

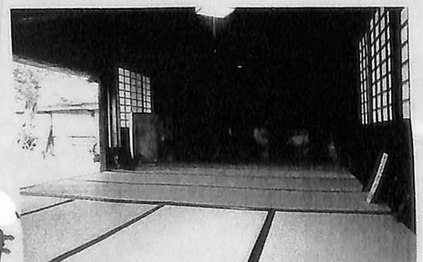
⑤自刃した隊士の１人飯沼貞吉は息絶え絶えの中足軽新蔵の妻に助けられて甦生した。ただ一人の生存者となったが生涯白虎隊のことを口にすることはなかったという。

⑥飯沼の死後、晩年に書いた詳細な書簡が発見され、白虎隊の悲劇が世に知られた。
飯盛山での自刃は後世に語り継がれて人々の涙を誘った。

＊自刃した白虎隊士数の定説は 19 人となっている。飯沼の書簡は 16 人だが帰城しなかった 20 人全員を自刃隊士とした



滝沢本陣



滝沢本陣

### 3）篭城一ヶ月巨城落つ——容保無念の降伏

①会津藩の篭城は一か月に及んだ。城の守りは厳重で最後まで落ちなかったが、城内では兵糧が底をつき武器弾薬も不足した。

②慶応４年９月 22 日ついに降伏、会津若松城は新政府軍に明け渡された。

### 4）２つの少年隊の悲劇を考える

①２つの死の違い

二本松少年隊＝藩と君侯のため戦って戦死。武士の子弟として「本望」ともいえる名誉ある死

白虎隊＝落城とはや合点した無駄死に。本懐をとげることができなかった無念の死

白虎隊の方がいじらしくなお不憫といえる。

②白虎隊は、戦前教育下「忠義」の模範で、戦争遂行の精神的支柱とされた

こうした苦い体験を経ながらもなお「白虎隊の悲劇」と「隊士たちの心境」は私たち日本人の心を捉えて離さず今日に顕彰されている。

③改めて２つの悲劇の原因を探れば、その第一因は藩主の松平容保にゆきつく。

国内外の情勢を無視し、ひたすら徳川幕府の存続のみに走って近代国家統一に反抗したこと

不運が重なったとはいえ身勝手な戦さは結果として多くの藩士や家族、領民を犠牲にしたこと。

その象徴が「白虎隊」であった。

④秋の一泊旅行を楽しみにしてください。

以上

会津に入った主な応援部隊

旧幕府伝習隊＝歩兵奉行・大鳥圭介以下 200 名弱

新撰組＝副長・土方歳三、会津隊長・山口二郎(斉藤一)、島田魁、中嶋登ら甲陽鎮撫隊瓦解後の生き残り隊士

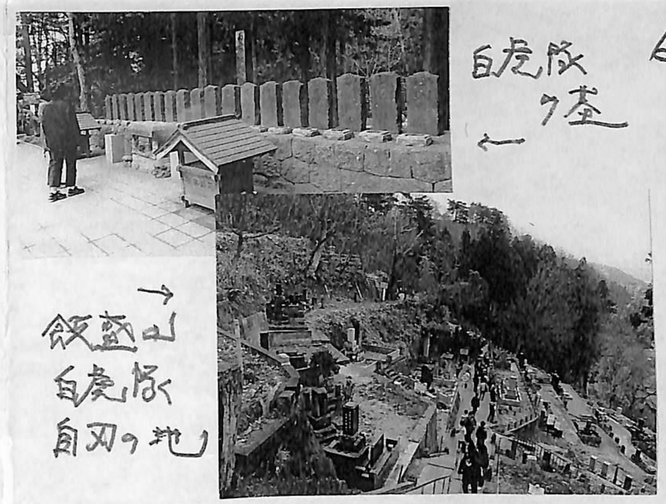
彰義隊残兵＝輪王寺宮(列藩同盟統帥、東照宮、寛永寺座主)、覚王院(寛永寺執事)

前京都守護職＝松平定敬(桑名藩主、容保実弟)など

会津若松城

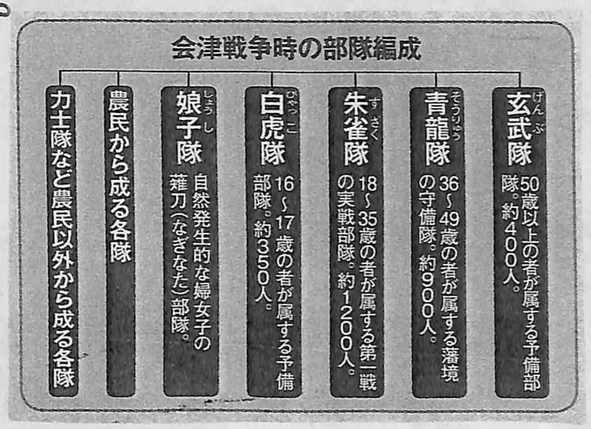
白虎隊自刃図

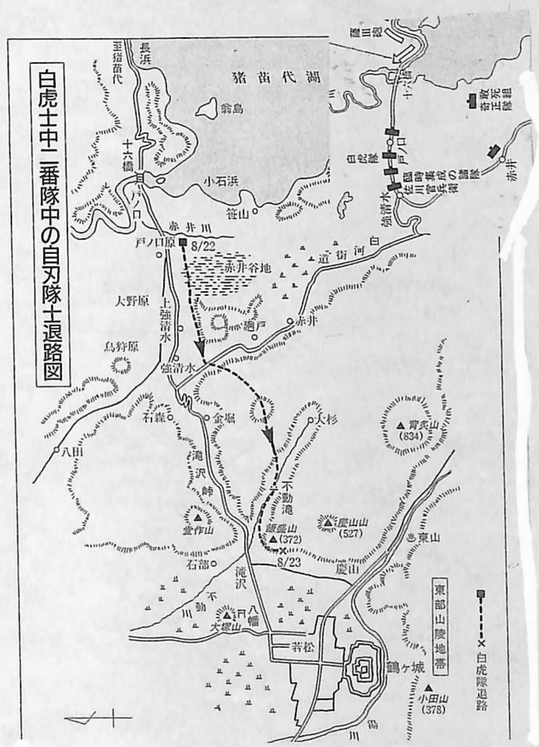
十六橋



白虎隊の墓

飯盛山 白虎隊の自刃の地




| 隊名 | 人数 | 戦場 | 期間 |
|---|---|---|---|
| 士中一番隊 | 三七人 | 外郭門<br>本丸<br>南門 | 八月二十三日<br>八月二十三日<br>八月二十三日 |
| 士中二番隊 | 三七人 | 戸ノ口原 | 八月二十二～二十三日 |
| (合併白虎隊) | 五三人 | 西出丸 | 八月二十四日～開城 |
| 寄合一番隊 | 九八人<br>主力<br>一部 | 津川口<br>舟渡<br>熊倉村<br>三の丸<br>一ノ堰 | 七月十五～八月二十五日<br>八月二十七～九月六日<br>九月十一日<br>籠城戦<br>九月十五～十七日 |
| 寄合二番隊 | 六二人 | 津川口<br>舟渡<br>三の丸 | 七月十五～八月二十五日<br>八月二十七～九月六日<br>籠城戦 |
| 足軽隊 | 七一人 | 大平口<br>籠城 | 武器等不備のため統一行動不可、他の補助役 |
| 合計 | 三五八人 | | |

下士　中士　上士

士分

はおりのひも色で区分

## 白虎隊自刃——八月二十三日

朝から深い霧だ。白虎隊の少年たちは疲れはてていた。二個のにぎりめしは昨日のうちに食ってしまったので、腹がへってしかたがない。ろくに眠ってもいない。霧でびしょぬれで寒い。隊長の日向外記は、

「戦いがはじまる前に、食糧をさがしてくる」

と後方へさがった。が、日向は朝になっても戻ってこない。そこで、篠田儀三郎が、

「おれが代わって指揮をとる」といった。

政府軍の砲射撃がはじまった。白虎隊も溝の中に散開して射ちはじめた。会津軍は、ほかに敢死隊、奇勝隊、遊軍寄合組などの志願者の隊がざっと五百人ばかりいた。

が、武器の差が甚だしい。政府軍の洋式銃砲の威力はすさまじかった。立ち所に、志願諸隊はおびただしい犠牲者を出し、各隊長の長野、上田、小池などが戦死した。総くずれになる。

篠田もやむなく、

「白虎隊退却！」とどなった。

そして、おどろいたことに、退却する会津軍を、霧を利用して政府軍がどんどん追いこした。政府軍は若松城下への突入を急いでいた。会津の敗兵をおきざりにして走って行く。白虎隊が滝沢峠に着いたとき、峠は先に着いた政府軍で溢れていた。ここから飯盛山の下に、天保年間に掘られた用水路がある。約百メートル。この洞門をぬけて、白虎隊は飯盛山のふもとに出た。疲れと寒さでもうクタクタである。飯盛山にのぼって、隊士たちは、

「あっ」

と声をあげた。若松の城下町は一面の黒煙である。赤い炎が随所で噴きあがっている。鶴ケ城は、その黒煙と炎の中だ。少年たちは叫んだ。

「城が落ちた！」

「城が燃えている！」

実は、これは、疲れと飢えと寒さで、かすんだ目の錯覚だった。城はまだぶじだった。が、少年たちには落城と見えた。

「もはや、これまでだ。いさぎよく切腹して君国に殉じよう」

少年たちはそう決意した。そして互いにさしちがえたり、ひとりで腹を切ったりして、つぎつぎと生命を絶った。

「現代にまで戦争・戦術・会津城」から

## 二七、若松東方防御線の突破（福島）

□慶応四年八月二十二日。
□日橋川渡河点――猪苗代湖十六橋の突破。
□橋の破壊寸前に敢行された決死的突破作戦で、若松城（鶴ヶ城）東方防御線の一角は崩れ去る。
□海道の官軍は駒ヶ峯で前進をはばまれ、山道軍も敵のゲリラに遇って進撃はままならなかったため、征討本営は枝葉を断って根幹を孤立させる策を立て、中山口に敵主力を牽制、主力をもって保成、勢至堂口両方面より一挙に若松城を衝くことに決した。かくて八月二十日、官軍は二本松および本宮を発し、薩州、長州、土佐、大垣の兵は保成峠へ、薩州の別隊と大村の兵四百は中山峠めざして進撃を開始。翌二十一日、官軍は長・土の兵を右翼に、薩・垣の兵を左翼に配して保成峠の敵塁を攻め、激闘のすえここを占領した。そして息もつかせず敵を猪苗代方面に急追したので、会津兵は猪苗代城を焼いて逃げ、日橋川の渡河点で官軍を阻止しようとした。しかし、橋の爆破されることを恐れた薩軍指揮官の川村与十郎（純義）は、全力をあげて日橋川に突進、まさに破壊されんとする十六橋を一気に押し渡った。会津若松城の運命はこれで決まったのである。

## 二八、若松城下の激戦（福島）

□慶応四年八月二十三日。
□会津鶴ヶ城下で展開。
□戊辰戦争中最大の激戦。
保成峠の塁壁破れ、猪苗代もまた官軍の手に帰すとの飛報に接した会津侯は、二十二日、みずから兵を率いて滝沢村に出陣した。飯盛山における白虎二番隊の壮烈な自刃は戸ノ口原の敗戦直後に起きたものである。城下に殺到した官軍は、一隊をもって城を囲み、一隊をもって東方天章寺口に迫り、主力をもって長驅城北甲賀町に向かい、郭門に喊喊した。会津兵は城門をひらいて逆襲に転じたが、官軍はますます増援を得て城兵を圧迫し、桜の馬場、西郷、内藤邸の土塁に拠って乱射、乱撃を加えた。折から土佐軍の一小隊約八十名は湯川の左岸より城内に砲撃を浴びせ、城南天神橋方面より三の丸に突入を敢行しようとこころみる。松平容保はただちに城内老幼者で一隊を編成、進撃隊と称して南門より突撃させた。かれらは飛弾をものともせず奮戦し、天神橋畔に累々たる屍の山を築いた。当日の戦闘は戊辰戦争中もっとも激烈をきわめ、会津藩の戦死者四百六十余名、藩士家族の殉難者二百三十余名、市民の死者も多数にのぼった。凄壮悲惨な話を残したのも実にこの日であった。

## 三〇、鶴ヶ城総攻撃（福島）

□明治元年九月十四日。
□会津城下各方面で展開。
□会津開城の端緒となり、ここに奥羽軍反抗の拠点は壊滅。
□八月二十二日、官軍が会津城下に進入して早くも二旬、東北の天地はすでに冬を迎えようとしていた。攻城軍の兵力一万五千、砲百十余門。攻撃準備がすっかりととのった官軍側は九月十四日を期して、鶴ヶ城総攻撃の火蓋を切ることにした。これに対する会津側は城内に兵三千、城外に千五百の遊撃部隊があって官軍の攻撃に備えた。十四日午前八時、攻城軍は小田山、館、愛宕山方面から一斉に攻撃をはじめ、白河口の部隊は城の東北より、日光口の兵は西南方面より、薩長、彦根、大垣、備前の兵は、北方桂林寺口および融通寺口より果敢に攻めたてた。会津軍は北出丸、西出丸、豊岡に大砲を配置して官軍に砲火を浴びせ、一方、守兵を各方面に出撃させて、ひたすら防戦に努めた。この間、諏訪社、北甲賀町、東天寧寺口の戦闘はもっとも激烈をきわめ、随所に死体の山が築かれた。戦闘は二昼夜にわたってつづいたが、城内の惨状は言語に絶し、兵器弾薬や兵糧もまた底をついたので、松平容保は開城を決意し、これを全軍に布告した。

## 三一、会津開城（福島）

□明治元年九月二十四日。
□会津鶴ヶ城。
□奥羽の戦乱、終局を迎える。
□官軍の総攻撃で会津城内に呻吟する傷病者は約六百。籠城軍はこれら傷病者にたいする施薬治療にもことかく、もはやほどこすすべもなかった。松平容保は勢いの支うべからざるを悟り、ひそかに諸将を会して開城の決意を伝えると、並居る猛将たちも流涕滂沱、寂として声がない。かくて十九日、容保は手代木直右衛門、秋月悌次郎を米沢藩に遣わし、開城の斡旋を依頼するとともに、二十二日午前十時、この旨を全軍に布告して、白旗を鶴ヶ城追手門まえにたかだかと掲げた。白旗は婦女子の肌着を縫い合わせてつくられたという。同日十二時、軍監中村半次郎が諸藩の兵を率い、錦旗を揮して甲賀町通りの式場にはいった。容保はみずから謝罪書を軍監に提出、形どおりの儀式を終えると、藩祖の廟を拝し、戦死者の霊に香華を手向けて、午後三時、城門に整列した三千の藩士と別れ、滝沢村の妙国寺にはいった。投降の会津兵は猪苗代に移され、傷病者は征討軍病院に収容された。越えて二十四日、軍監中村半次郎は鶴ヶ城に入城、天守閣にへんぽんと錦旗を翻した。

## 白虎隊

□会津藩の少年隊。慶応四年三月十日結成。
□官軍の会津進攻に備え、軍制改革で藩の予備軍として誕生した。しかし、戦況が激化するにしたがい、戦闘部隊として越後口や戸ノ口原方面に出動した。
□隊士は十五歳から十七歳までの少年で、隊長は日向内記。上士編成の士中、中級藩士子弟の寄合、下級藩士からなる足軽など各二隊があり、隊員総数三〇〇人。旧幕士官・大川正太郎、沼間慎次郎にフランス式伝習を受けた。
□隊長・日向内記。隊士は池上新太郎⑯、永瀬雄次⑯、間瀬源七郎⑰、簗田武治⑰、飯沼貞吉⑯、伊東悌次郎⑰、篠田儀三郎⑰、西川勝太郎⑯、野村駒四郎⑰、津田捨三⑰、簗瀬勝三郎⑰、井深茂太郎⑯、石山虎之助⑰、伊藤俊彦⑰、石田和助⑯、林八十治⑯、津川喜代美⑰、有賀織之助⑯、安達藤三郎⑰、鈴木源吉⑰――以上、飯盛山で自決。隊長・春日和泉、西村四郎⑰、佐久間直紀⑰、坂井源吾⑯、星八弥⑰、星勇八⑯、若林八次郎⑯、好川滝三郎⑯、高崎駒之助⑯、安恵助三郎⑯、山本太郎⑰、藤森八太郎⑯、小松八太郎⑯、遠藤嘉竜次⑯、青山重之進⑰、岸彦三郎⑰、百瀬外次郎⑰、関原重太郎⑰、鈴木五郎⑰、鈴木平助⑯、樋口勇四郎⑯――以上、越後口で戦死。
□明治元年九月二十四日、会津藩の降伏により解隊。

## 二本松少年隊

□慶応四年七月下旬編成。
□官軍の来攻に備え、留守家老・丹羽一学の提唱で、城内残留の少年をもって組織。
□隊長は藩の砲術師範役・木村貫治の嫡男銃太郎。隊士はその門下生三六名で編成され、七月二十九日、城外大壇口で官軍と戦った。
□隊長・木村銃太郎㉒、副隊長・二階堂衛守㉓、久保豊三郎⑬、岡山篤次郎⑬、高橋辰治⑬、遊佐辰弥⑬、徳田鉄之介⑬、小川安次郎⑬、後藤鈔太⑬、大島七郎⑬、上田孫三郎⑬、水野進⑭、鈴木松之介⑭、木村丈太郎⑭、成田才次郎⑭、武谷剛介⑭、金田熊吉⑭、宗形幸吉⑭、馬場定治⑭、中村久次郎⑭、渡辺駒之助⑭、成田虎治⑮、三浦行蔵⑮、上崎鉄蔵⑯、根来梶之助⑯、奥田牛之介⑯、大桶勝三郎⑭。
□同日の戦闘で隊長以下一五名が戦死、少年隊は壊滅した。

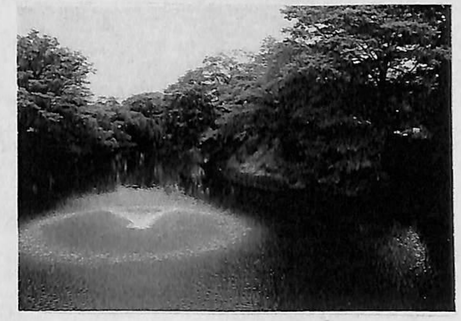
「歴史読本」96.12
幕末維新人物秘史」
から



城をお内ご案

新政府軍と攻防を自焼した柵倉城

維新戦争で奪う地形河城山は
東北大地震で傷跡も生々しい ←



石垣、塀が残る →
猪苗代城

激戦がくり広げられた会津若松城」藩祖正之が眠る

少年悲劇の「二本松城」は
丹羽石垣の傑作 →